

私の投稿句の背景（令和八年六月例会）

（投稿句） 入ればとそと上げられし日傘かな

もう知らないつと畳まれし日傘かな

詩集団『渦』の人たち（その二） 北 洋一

私を驚かす短歌が、ある地方新聞の文芸作品投稿欄に「再び」掲載されたのは「二度目の」無分別をしかしてから八年が過ぎた夏だった。十八歳の時の「一度目の」無分別はともかく、二度目は、職を退いた後の、もう分別の塊で出来ているような高年になってからのことであり、もう彼の人の短歌を見ることがあるまいと諦めきっていたので、その驚きは半端ではなかった。

「再び」掲載、「二度目の」無分別、「一度目の」無分別と錯綜するワードを使ってしまったが、読んでくださる方を最初から戸惑わすのは本意では無い。ただ、話は六十年を超える長い歳月に渡るのである。

ある地方新聞に、私を驚かす短歌が掲載されていたのを「初めて」目にしたあの日のことから話しを始めようと思う。何事も「初めて」があって「再び」があるのであるから。

転勤の多かった勤め人生活を終えると、二人の子供のそれぞれの家庭

にそう遠くない所にしたいという妻の強い思いもあって、東京に隣接していて、太平洋に突き出ている半島を大部分とする県に終の住み処を定めた。

私は転勤するたびに、新しい人間関係をスムーズにいち早く構築する手助けとして、地元の行事や、ちょっとしたニュースを話のきっかけに持ち出せるようにと、どこの勤務地でも全国紙とは別に地方紙を自宅でも購読していた。

職を退いてのこの街なので、何も急いで地方紙を購読するまでのことは無かったのだが、引越し作業の最中に訪ねて来た新聞販売店の店員に「ここらでは地方紙はなんていうの？」がつい口に出してしまった。

その地方紙は、読者拡張の一手段としてでもあろうが、月前半の第二日曜日と月後半の第四日曜日に「半島文芸」と銘打った一ページに「俳句」「川柳」「短歌」「詩」の投稿作品を全国的にも名の通っているそれぞれの先生方の選考を経て掲載していた。

引越してまだ二、三か月ほどしか経っていない初夏であった。波静かな東京湾を窓越しに眺めながら私は、いつものように地方紙を手にとった。開いた先に「半島文芸」のページがあるのを見て、隣で全国紙を読んでいた妻に

「おい、今日は日曜日だぞ」

と言うと、妻は読んでいる紙面から顔を上げず

「私たちは毎日が日曜日ですよ」

と応じた。確かに、と頷きながら私は「半島文芸」の紙面を見始めた。それと言うのも若いころに、一時期ではあったのだが「短詩」を書い

ていたことがあるのでつい、文芸欄に目が行くのである。

関心のある「半島詩壇」は後でゆっくり見ることにして、私は紙面右上の「半島俳壇」にさとと目を通すと、すぐに左上部の「半島歌壇」に目を転じた。途端、特選の第一首に私の目が釘付けになった。

その短歌が、

「詩集団渦てふ会の・・・」で始まっていたからである。

短歌の全体三十一文字は著作権も気になるので略すが、「詩集団渦」と言うのは、私が高校三年生の時に入れてもらっていた会の名前で、月に一度例会を開き、ガリ版刷りの会誌を出していた。定年退職が未だ五十五歳であった昭和三十年代半ばの頃の事である。私をその会に誘ってくれた高等看護学院に入学したばかりの笠井さんと私の二人だけは未だ二十歳に届いていなかったが、他の会員は、「綾さん」とよばれていた代表世話人こそ前年に市の職員を年満退職されていたものの、残りはみんなバリバリの現役で、自称「若き青年詩人」たちであった。

「詩集団渦」という、私の中に五十有余年もの間埋もれていた文字が目飛び込んできたのだから、その衝撃が尋常であろうはずはなかった。私は直ぐに、読み終えた新聞を入れているラックから、全国紙は放りだして地方紙だけを選び分けて机上に重ねた。

その中から、前回の掲載日の第二日曜日の新聞を見つけ出し、「半島文芸」の紙面を広げた。しかし、「半島歌壇」に、あの短歌の作者である三浦康子の名前はなかった。だったら「半島詩壇」にこそ三浦康子の作品があるはずだ。私は今度は「半島詩壇」を、第二日曜日版、第四日曜日版の両方ともを念入りに見たが、見つけることはできなかった。

ラックには今月分のものしか無かったので、「おい、どうしたんだ」と怒り口調の私に「子供会の資金援助とかで、先月分のもはもう自治会の置き場に出したわよ」と妻がのんびりと答えたので、ますます苛立ち、「図書館に行つて来る」と言つて部屋を飛び出した。

妻は「旦那のいつものせっかちが始まった」と、ぶつぶつ言いながら散らばっている新聞を片付けたことであろう。

図書館の入り口に自転車を持ち捨て、まだ収まらぬ荒い息遣いのまま、受付の若い女事務員に

「五年分の地方紙を見たいので、すぐ出してもらいたい」と、頼むというより、部下の誰かに命令するような口調で言つてしまった。もう、現役でも何でも無いというのに。

事務員は「一年分ならありますが・・・」と言葉を濁した。焦った私は、「一年分だけでは役に立たないのだ。取り敢えず五年分調べたいのだ。まさか、一年過ぎたからと言つて焼き捨ててはおらんでしょうな」

言つてしまつてから、いかん、いかん。これでは、カスハラになる。職を退くころになって、色々なハラスメントの教育を受けて、多いに苦勞した私は直ぐに自制した。

「一年過ぎたら一か月単位でDVDで保管しています。今年の一月からのものは現物の新聞をお渡しできますが、それ以前の五年分は、五年分でしたら・・・六十枚になりますので、DVD六十枚をお出しします。あのガラス窓の視聴室で閲覧されて下さい。どうぞ」と、もの静かに答えた。

その親切な物言いに、平素の口癖の礼言葉「サンキュー」に、日本語

で「有難うね」を付け添えた。本当にありがたいと思った時だけにそうするのが私の流儀なのである。これで私の脈拍は平素の七十そこそこに落ち着いた。測ってみたわけでは無いがそのはずである。

言われたガラス窓の部屋で、備え付けの共用パソコンにDVDをセツトして、見たい日を選択し、見たい紙面上の見たい部分を印刷する方法を手ほどきしてもらった後、昼飯抜きで、まるで若いサラリーマン時代に戻ったかのように、私は「仕事」に熱中した。共用なのにパソコンと言うのもおかしい気がするが、などと余分なことを思いながら、ルンルン気分だった。仕事好きの性分は、職を退いたからといって直ぐに消えるものではなさそうだ。

今年度のものは、紙上に三浦康子の歌を見つけると、紙面左上の「半島歌壇」の部分をA3判に原寸コピーしては、次を探すという「仕事」だ。並行して「半島詩壇」にも目を通したのは勿論であるが、結論から言えば「半島詩壇」に、三浦康子の名前を見つけることは遂にできなかった。

こうして私が採取した短歌は二十首余りになった。

三浦康子の短歌が「半島歌壇」に掲載され始めたのは三年半ほど前からであることは分かったものの、「渦」を直接的に詠んだ短歌は、あの一首を除いては他には見つからなかった。

しかし、「詩集団渦」のあった街を思わせる短歌が、二首見つかったので「詩集団渦てふ会の・・」の「渦」は私の所属していたあの「渦」に間違いないと確信できたのは大収穫だった。

だが、肝心の三浦康子という見知らぬ名前を特定できそうな短歌を見

つけることはできなかった。

三浦康子とは一体、誰だろうか。

家に帰ってゆっくり見るのが待ち切れず、帰り道の川沿いの土手に自転車倒して坐り込んで、採取した短歌を一首ずつ読んでみたが、それらしき人の顔は浮かんで来なかった。

印刷した紙面とコピーした紙面を持ち帰った私は、二十首余りの短歌を自分のパソコンに掲載日と共に打ち込み、A3紙一枚に並べて印刷した。

作者が「渦」に関わっていた人であれば、あの「渦」のころの詩の作風なりが、きつとこの二十首余りの短歌の中に残っているはずだ。

そうだ、「渦」をしつかり見てみよう。私は現役時代の、問題解決の手法に沿うかのように逐次、事を進めていった。

まだ整理できずに積んであった引越し荷物の底の方から、「洋一・青春時代『渦』ほか」のラベルの張つてある蜜柑箱を見つけ出すと、傍に座り込んで、「渦」を全部取り出した。一瞬、強い厭な匂いが立ち、思わず顔をそむけた。我が愛しき青春時代そのものであるというのに。

覗きに来た妻は、崩れた荷物の山を見てヤレヤレという顔をしていた。いや、振り返って見たわけではないけれどそんな顔をしていたはずだ。

ところで、「詩集団『渦』の人たち」の(その一)にあたる小品は、尻切れトンボの感を読者に与えたまま終えた。いつか(その二)を書く機会があるだろうと言う思いがあったからである。その終わりの部分は次の通りであった。

日曜日、私は、清書した作詞ノートを持って、湾を見下ろす高台に三方さんを訪ねた。言っていたように、熟した実を付けた桜の大樹が庭にある青い屋根の家に、三方さんは独りで住んでいた。

私を出迎えた三方さんが姉さん被りだったのには驚かされた。

桜の実の熟す大樹や打ち薫る

桜の実熟して大樹噓せ返る

短い夏と秋が、慌ただしく過ぎて行きすぐに卒業が来て、私は、私に建前でない本音の大人の世界の入り口を見せてくれた詩集団『渦』の人たちと別れてその街を出た。

(2025.7.31)

最終の一文、短い夏と秋が、慌ただしく過ぎて行きすぐに卒業が来ての、「慌ただしく過ぎて行った」ことを書かねばなるまい。三浦康子とは一体誰なのかを見つけ出すためにも必要なことであるように思われるからである。

だから、それを書いてゆく。

青い屋根の家に、三方さんを訪ねた直ぐ次の「渦」の八月例会、私は

会が始まる三十分以上も前から、部屋の入りで三方さんが来るのを待っていたのに、定刻の五分ほど前に来た三方さんは、そんな私の前をスツと通り抜けながら「勉強をさぼったら駄目よ」と言って、そのまま他の会員と話しながら部屋に入って行った。

私は一遍に、しゅんとなってしまった。

三方さんと目を合わせたのかどうかさえも分らなかった。目が合ったらどんな顔をしたら良いのだろうかとか、どんなことを言ったらよいのだろうかとか、あれこれ思い巡らせていたというのに。

部屋に入って、そっと盗み見すると、定席に座った三方さんは、隣の綾さんとその向こうの副世話人の伊藤さんと、身を乗り出すようにして何か話しかけていた。私のことなどまるで眼中にないみたいにしかなかった。いったいどうしてなのだろうか、私は半べそ状態になった。

隣の席の笠井さんとは、顔を合わしたく無かったが、定席なので仕方がなかった。おずおずと座っていると

「あれだけ言ったのにお馬鹿さんね」

と言われた。何の事を言ってるのか、その時には未だ分からなかった。

会の途中のコーヒープレイク、まだそんなしゃれた言葉を知らなかった私は、あからさまにトイレ休憩と言っていたが、その時、三方さんに

「終わったら『ドガ』で待ってなさいね」と囁かれて、私は途端に元気になって、軽やかに席に戻った。

にこにこしている私を見て、笠井さんは

「馬鹿ね、君って本当にお馬鹿さんね。気をつけるのよと、あれだけ言ってたあげたのに。どうしてなのよ」と言った。最後の「どうしてな

のよ」は怒りの口調に聞こえた。

あのことを知っているらしい口調だったのが、不思議でならなかった。私は三方さんに言われた通り、誰にも、何も話してはいないのにどうしてだろうか。三方さんが、まさか笠井さんに話したりするはずは無いし、笠井さんにいつか聞いてみようと思っていたがそのままだった。だから本当のことは今も分らないままだ。

ただ、この歳になって思えば、三方さんは、笠井さんにどういう言い方かまでは分らないが、きつと何かを言ったのだろうと思う。それを聞いた笠井さんは、その時、軽く「そう」と躲したのではなからうか。

笠井さんに悔しいというような思いがあつたか無かつたは別にしても、笠井さんは軽く「そう」と躲したように思う。そういう負けん気の強い人だったように思う。ここは、小説だったら如何様にも書けようし、書いてみたいところだが、そうもいかない。

待っていた「ドガ」で、三方さんの家でのことに触れようとすると、

「君、同じことを考えたら駄目よ」とピシリと言われた。

そうか、そのことを言おうとして私を「ドガ」に待たせたのか、何か優しいことを言ってもらえるものとばかり思っていた私は、又直ぐにしゅんとなってしまった。

追い打ちをかけるように、三方さんはゆっくり回っている天井の扇風機の羽根を目で追いながら、「彼にこれから逢うことになっているの。今日はゆっくりできないでごめんね」と言った。これから逢うと言う相手の名前は、あの日に聞いて知っていた。

三方さんは、コーヒー一杯を、まるで相手との約束までの時間を調整

するかのようになんげつ口になんげら、

「君の今日の作品は佳かつたわよ。次回も楽しみにしているから励みなさいね。来月も、会の後にはまたここで逢いましょうね。厳しい批評をしてあげるから、それを楽しみにしていい作品を作るのよ」と立て続けに言った。

「同じことを考えたら駄目よ」と言っておいて、どうしてまた「来月も『ドガ』で逢おう」というのか、それに、見よかしにあの男の事を言ったり、三方さんは一体、どういうつもりなのだろうか。

今思えば、私の様な融通の利かない晩熟の少年をどのように扱ったらよいのか、三方さんにもあの日、きつと迷いがあつたのではなからうか。

三方さんは、自分の時計をちよくちよく見ながら、取り留めのない話を続けたが、私の耳は、最早聴いてはいなかった。

時間が来て「ドガ」を出ると三方さんは真つ白い日傘を差した。

三方さんの着ていたワンピースの濃い青色が、真つ白い日傘の中に半分隠れた。残っているワンピースの下半身の濃い青色と、日傘の真つ白とのコントラストが、まだ陽の残っている夏の街角に鮮やかだった。何とも美しかった。六十年を超える歳月が流れたというのに、今も目に残っている。

その鮮やかな美しさが、憂鬱だった私の心の中を照射し、あの日傘の中に一緒に入って、歩いてみたい、いや、はつきりとその様な言葉になつて思つたわけでは無いが、憂鬱な心が和んだ。しかし直ぐに、これから三方さんはあの上司の男性に逢いに行くのだと思うと、また憂鬱にな

って、駅までの三方さんとの同じ道を、渋々と後ろから付いて歩いて行くしかなかった。

そんな私を、三方さんが誘った。

入ればとそと上げられし日傘かな

言われても、私は日傘に入る気にはなれなかった。三方さんは立ち止まって私を待っていたが、私も立ち止まって、三方さんとの距離を縮めなかった。私の三方さんへの不満を示す精一杯の意思表示だった。

そんな私の気持ち等とうに見通しているかに、三方さんは「何を拗ねているのよ」と揶揄うように言った。

もう知らないつと畳まれし日傘かな

駅に着くと、三方さんは「御免ね」何かそのような言葉を使って改札口の奥に消えて行った。何が「御免ね」なのだろうか。その日、私は、とうとう最後まで振り回されっぱなしだった。

言っていたように、「渦」の例会が終わると三方さんは、私を「ドガ」に連れて行くようになった。

三方さんは、私のその日の作品の「てにをは」の一字一字を吟味してくれた。例えば、私が例会に提出した六行詩「哀しみ」は次のようなものであった。

「哀しみ」

北 洋 一

秋天の中を

れんれんと降り来る

波動の淋しさよ

お前が

地表に突き当たると

哀しみが生まれる

この作品の後半三行を

お前が

地表に突き当たる時

哀しみが生まれる

としたらどうか。「と」と「時」でどう違うか、否「時に」が良いのではないか。否、波動という形ないものが地表に「突き当たる」はおかしいか。その日はそれだけで時間が経ったほどだった。

この「哀しみ」は私が未だ「渦」に入会する前に作っていたもので、笠井さんに見せたことがあった。その時、笠井さんは

「私にも、れんれんと降り来る君の言う波動の淋しさが見えるわよ。本当に見えるのよ。あれこれ何も言わないところがいいのよ」と言っただけで褒めてくれた。今の「写真俳句」のように、自分の詩に、ちよつとしたデッサンを添えるのが好きだった笠井さんは、私に色紙をくれて、「哀し

み」を書くように言った。出来たものを見せたら、「二、三日預からせてね」と言って、抽象的な素描を背景のようにして描きたした色紙を、額縁に入れて戻してくれた。あの頃、勉強部屋の机の真ん前に飾っていたので、今も、未整理の蜜柑箱のどこかに在るはずだ。

笠井さんだけが住んでいた私の心の中にいつの間にか、いや、青い屋根の家から帰ってからと言うもの、三方さんも住みつくようになった。だからと言って、笠井さんを好きだという気持ちが少なくなっただのかと問われれば、そんなことは少しも無いと答えるに決まっているのに、笠井さんは私を避けていて、

「遊びに行きたい」と言ったら

「三方さんに遊んでもらいな」とにべもなく断られた。

例会では隣席だったので、そっと机の下で手を伸ばしたら、笠井さんは前を向いて例会のみんなの議論に加わったまま、そ知らぬ顔をして机上に在った私のもう一方の手の甲をピシッと叩いた。

あれだけ笠井さんの家で遊んだのに、あれだけ私の詩を批評してくれたのに、誰も居なければ外でも手を繋いで歩いていたのに、うなじに唇を寄せるのを許してくれたのに、どうして駄目なのか、私は自分の身勝手にまだ気付いていない「恋愛に晩熟の少年」だった。

三方さんとは、例会の日だけでなく、直ぐに他の日曜日にも「ドガ」で逢うようになった。三方さんは、藤村の「若菜集」と上田敏の「海潮音」を題材にして、日本の近代詩歌の幕開けの頃の先人たちの業績について話してくれた。

何度も逢うようになって、私は三方さんの眼を信頼するようになり、この年上の人に素直に憧れの気持ちを持つようになった。

「ドガ」でその日の作品を批評してくれた何かの話の中で、「私がつと若かったら良かったのにね」とテーブルの上の私の手を取って言ったりしたことあつて、三方さんもきつと、「僕が好きなのだ」と思うようになった。

「ドガ」で、三方さんは私の詩の批評はさっさと手短かに済ませて、その後、私とあれこれ話す時間の方を、楽しみにしているかのようにみえた。勿論、私もそうだった。

私が前に「趣味は映画鑑賞」と言ったのを覚えていて、「好きな映画のことなどを話してよ」と催促したりした。

私はここぞとばかりに、

木下監督が「檜山節考」で、ラストシーンに現在の篠ノ井線の「姥捨駅」を登場させたのは、この映画のようなことがあったのは嘘ではないのだと言っているのだが、それだけではなく、昭和の今も同じことが、「姨捨」が、起こっているのではないかと告発しているのだ。実はこの後半の告発部分は、高一の時の国語の教師、この先生は授業をしばしば脱線していろいろな蘊蓄を話してくれて生徒に人気のあった若い先生だったが、その河口洋治先生の説を、断りも入れず自分の発見かのようにとうとうと話した。「そうなの、そうなのね」と深く頷きながら聞いてくれた三方さんに、私は一層昂揚して今度は、好きな西部劇のことならいくらでも話せますよと話しを続けた。

西部劇の決闘三部作で有名なスタージェス監督が「OK牧場の決闘」

と「ゴーストタウンの決闘」と「ガンヒルの決闘」の間に、それらとは全く異色のヘミングウェイの「老人と海」をリリースしたのは、彼はあれを、「老いたガンマン（老人）」と「若き無法者のガンマン（カジキと鯨）」の決闘として撮ったはずだ。だから、本当は決闘四部作なのだ。このことに気付いている映画評論家はアメリカにもいないはずだ。世界でただ一人僕だけなのだと、胸を張って話した。

（閑話休題）木下の「檜山節考」とスタージェスの「老人と海」は共に昭和三十三年に公開された。後になって知ったのだが「老人と海」は、最初別の監督で計画されていたもので、スタージェスが自ら手掛けたものでは無いとのことで、私の説は架空のものでしかなかった。それに、「決闘三部作」という呼称も日本の洋画配給会社が勝手に命名したもののようで、スタージェスが意図していたものなのかどうかは不明である。それはまあ別として、河口先生に、映画でも文学でもその作者の意図は何処に有るのか、表面に現れているものだけを鵜呑みせず、その奥へ向かって更に思考を深めて探るということの大事さを、あの「姨捨駅」を通して教わったことを今でも感謝している。そのことは、後の私の生き方のバックボーンになったのであるから。

三方さんは、微笑みながら「それで、それで？」と顔をくつつけるようにして聞いてきた。

近いうちに、その街の名画座にかかるはずの「わが谷は緑なりき」を一緒に見に行こうという約束をした。監督ジョン・フォードは西部劇の名匠だが、彼の西部劇がどれをとっても詩情豊かな作品になっているのは、この「わが谷は緑なりき」を観ればわかるのだと、三方さんに話し

たからである。

約束の日、「わが谷は緑なりき」(How Green Was My Valley)を観に行った。名画座の入り口で二枚切符を買ってくれた三方さんは、学生服の私に手渡してくれながら「私たちは姉と弟にしかみえないでしょうよ」と耳元で囁いてウフフと笑った。「だから、人の目を気にしないでいきましょうね」と言った。私は大きく頷いて「だったら、手を繋いでもいいでしょう？」などと返事をしながら、上映が始まったばかりの館内に入って行った。

席に着いて、私は握りしめた手を膝にきちんと置いて、スクリーンの方に顔を向けていたが、画面を見てはいなかった。一度見て知っている画面がどんどん素通りしていった。

三方さんの膝に手を伸ばして触れたいのに、なかなか手を伸ばせなかった。笠井さんとは手を繋いで歩いたこともあるというのに、私は相変わらず臆病な少年であった。

私が、自分の膝の上で手をもぞもぞさせているのをきくと三方さんは感じたからであろうか、すーと右手を伸ばして私の左手に重ねた。私がそっと顔を少し向けたら、三方さんはスクリーンの方を向いたまま、重ねていた手に力を入れてギュッと握ってくれた。漸く力が抜けた私は、手をそっと引いて、今度は私の方から手を重ねて指を絡ませて強く握った。暗闇の中で顔を見合せて笑った。

映画館の手を繋いで出ると、「トンカツが好きだ」と言った私を、草履の様なヒレカツを食べさせる店があるからと、連れて行ってくれた。好きなヒレカツを食べながら、今観てきたばかりの「わが谷は緑なりき」を、好きな三方さんと語り合うという至福な時間だった。それに、三方

さんが、ジョン・フォードを好きになって、彼の西部劇が来たら見に行こうと言ってくれたのが嬉しかった。

「ドガ」で逢うとそのまま映画を見に行くことが重なった。

イタリア映画でデビューしたばかりのジャクリーヌ・ササールの「芽生え(Guendalina)」を、私に付き合っただけに観に行ってくれた時、エントランスホールのポスターを見て三方さんは、

「君は、こういうタイプの娘が好きなのね。そうよ、私にも若いころがあったのよ」といって、取り出した写真二枚を私にくれた。一枚は女学生の時の、もう一枚は最近のポートレートだった。「ササールによく似ていますね」と言ったら「本当？無理しなくていいのよ」と笑った。

どうして、写真二枚を用意して持ってきたのだろうか。三方さんは、「芽生え」を事前に調べていて、主人公がまだ十六歳の少女だということを知って、自分の女学生の時の写真を胸に忍ばせたのではなかろうか。ササールと同じ歳ぐらいと思われる女学生の三方さんは本当に清楚で奇麗に見えた。それを見せたかったのだ。そして、きっと「ササールに夢中になり過ぎないようにね」と言いたかったのではなかろうか。

それよりも、最近どこかで撮ったと思われるポートレートの三方さんの方が、私は好きだった。(今、その二枚がどこにあるかは言わない)

上映が終わって手を繋いでキネマ通りを抜けると、けばけばしいホテルが三、四棟ばかり連なっている通りに出た。顔を見合わせて、含み笑いをしながら急いで通り過ぎようとした時、

「寄って行ってもいいわよ」と三方さんが言っただけで止まろうとした。一

瞬、胸が高鳴った。同じことをちらっと思っていたからだ。しかし気が付くと、私は三方さんの手を強く引く張って、二人で人気のないところまで早足で抜けていた。

「嘘よ、嘘よ、ちょっと押搦ってみたただけよ」三方さんは息を弾ませながら言った。言いながら私を引き寄せてキスをした。私もそれに激しく応えた。この人が好きなのだという自分の思いが私を突き動かしていた。

映画を見て、キスをして、食事をして、私はそれで十分だった。それ以上に事が進んだ青い屋根の家でのことは、有ったような、無かったような、初めから最後まで自分の意志で為したものは何もなかったように思えるのに、薄暗い路傍で人目のこと等忘れてキスしていたのは、間違いない、私の強い意志だった。あの人が好きだという思いが為したのだ。別れての帰り道、私は、自分が恋愛の階段を少し上がったのを感じていた。そして、あの青い屋根の家に再び行く日が、そう遠くない内に又、来るだろうと思った。

笠井さんとは例会でしか会えなくなっていたが、

「君たち、噂になってるわよ。どうでもいいことだけだね」と、顔をそむけたまま言った。どうでもいいことなら、何もわざわざ言ってくれなければ良いのにと、口には出さなかったが思った。

あの闊達な「渦」の大人たちが、どんな風に噂話をしているのだろうか。そんな事の似合わない「若き青年詩人」たちなのに。

「ドガ」で、笠井さんに言われた通りを、三方さんに言ったら

「笠井君は、そういうことを言う人よ、気にすることは無いわよ。う

ちの『若き青年詩人たち』は、みんな恋に恋してているのだから」と他人事の様に言ったので、ほっとした。

そんな中、化石の収集が趣味の伊藤さんに誘われて、「渦の朔太郎」こと大山先輩と「渦の宗治」こと白川先輩共々、近隣の海食崖に中世代の貝の化石探しに行った。目当ての貝の化石にはなかなか出会う、早めに止めて海岸で飲み始めた。私も、ビールが好きだったので盛り上がった。

白川先輩が「この海食崖には、昔、好きな子と遊びに来たことがあるのだ」と話したことから、大山さんも伊藤さんも自分の初恋の思い出を語り始めた。私はもっぱら聞き役だった。

大人になっても、青春時代の恋というものは、深く心に刻まれて記憶に残っているものと言うことを、三人の先輩方から生に聞いていて、ふと、僕らの今のこの恋愛は、僕の記憶にどのように残ることになるのだろうかと思った。

僕らの恋愛は、これからどうなっていくのだろうか。どんな結末が待っているのだろうか。厭だ、厭だ、結末が来るのは厭だ。ずっとこのままでいいのだ。否、そうはいつでも……。

私は先輩方の話を耳にしながら堂々巡りに陥っていた。
気が付くと、

「北君、今のうちだよ。恋せよ少年！」と三人に揶揄われていた。
私と三方さんとの噂というのは、まあそんなところだったのだと思う。

好事魔多しと言うのだろうか。

あの上司のことを、私には言わなくなった三方さんが、その日「ドラ」での途中、早々と私を置いて先に帰った。「一寸あってね」と言っただけで理由をはっきりと言わなかったのを私は気にした。

あの日、私は好きだった伊藤整の詩集「雪明りの路」の中の「林檎園の六月」を三方さんと二人で読み合わせるのを楽しみにして、と言うのは、三方さんが例会で自分の詩を読み上げるときの、あの湿った声にも私は恋をしていたので、写し書きを二枚作って持って行っていたのだ。

私の好きな詩を、好きなあの人に、好きなあの湿った声で読んでもらうのだ。その後、今度は一節ごと読み合わせるのだ。若者の気持ちになったり、十四の少女になったり、肌明るい十八の乙女になったりしながら。どんなに素晴らしい時間が過ぎるだろうか、と心をときめかせていたのだった。それだけに私の落胆は大きかった。

あの方さんの上司への漫然としたものでしかなかった私の嫉妬心に、いや、その頃にはもうほとんど意識してさえいなかった嫉妬心に、突然火が着きむらむらと炎を上げて燃え広がった。

私の心の動きを、高速カメラで撮ったとしたら、きっとこんな風になるのではなからうか。

三方さんが早めに席を立ったのは、何でもない理由だったのかもしれないが、はっきりと言わなかったのはあの上司に逢う為に違いないはず

だ。「林檎園の六月」を三方さんと二人で読み合わせるのを楽しみに、周到に準備して来ていたものを、あの上司が全部駄目にしてしまったのだ。あの上司が居る限り、私は三方さんと好きなことを楽しむことさえできない。それに、三方さんは、あの上司に不満があると、前に漏らしていたではないか。

あの上司を、三方さんから遠ざけることが出来る方法は何いものだろうか。私は負のスパイラルに落ち込んでいた。

次の日、補習授業からの帰り道、三方さんの勤めている百貨店の宣伝部に、公衆電話ボックスから電話を掛けた。

最初、三方さんらしい声の人がでたので慌てて切った。十分ほどして、今度は男の声だったので、あの上司の名前を言うと「私ですが、どちら様でしょうか？」と返事があった。

私は鸚鵡返しに「三方さんを苦しめるような事は止めてください。止めなければあなたの奥さんにこのことを言いますよ」と、決めていたことを一息に言った。

相手の男は、送話器にもう一方の手を持って行って添えているのが分かる様な、くぐもった低い太い声で

「君は誰だ、啓子とはどんな関係なのだ」と言ったので、私は直ぐにフックを手で引き下げた。

動悸がなかなか治まらず送受話器を持ったまま、気が付くまで電話ボックスの中に立ち続けていた。

例会の日が来た。あれ以来、胃がキリキリするような思いが続いてお

り、何とか休む口実はないものかと考えていたが、一方であの電話の結果がどうなったのかも気になって、時間ギリギリに、例会のあるビルに着いた。

そんな私の心の動きを知っているかのように、三方さんは一階の入り口で待っていた。

「電話してくれたのは北君だよ。スッキリさせる切っ掛けを作ってくれて、却って良かったわ」と言って、私を責めるようなことは一言も口にしなかった。

十八歳の私の浅はかなこの「一度目の無分別」な電話の後で、三方さんとあの上司の男との間で起こったであろう修羅場を、今の私なら容易に想像できるが、あの日の私は、三方さんに怒られるのではなからうか、嫌われてしまったのではなからうかと、ただただ自分のことだけを心配していたのだった。

「今日はもう例会には出ないでこのまま休むことにしている。綾さんには話してあるから」と言った後、

「君はあの短詩のエスプリを生かして、いつか小説を書いてみたらどうかな」と言った。そして額に軽く口を寄せると「元気だね」と言って喧騒の中に紛れた。

一体何が起こったのか、私は頭の中を整理できないでいた。

とにかく、例会が終わったら急いで「ドガ」に行ってみよう。三方さんはきつと待っているはずだ。そればかりを思っただけでその日の例会には出た。隣席の笠井さんが、私の横腹を鉛筆で突きながら

「三方さんは休みだし、君は何か変だし、君たち何かあったの？」と

聞いて来た。いつもの笠井さんの「感」の鋭さには驚かされたが、今日はそれどころではないのだ。

私は「ドガ」で閉店まで待っていたが、三方さんが現れることは無かった。

それっきり、三方さんは「渦」に顔を出さないようになり、私はあの「青い屋根」を見に、二度ほど高台の下まで行ったが、上がって行く勇氣は無かった。でも、この街に三方さんは居るのだから、僕が勇氣を出しさえすればいつでも逢えるのだ。私は自分に勇氣が出るのを待っていた。

年が変わった最初の例会で、笠井さんが

「三方さんは上京して、系列の百貨店に勤め始めたそうよ」と教えてくれた。

私は、私の恋に間違いなく結末が来たことを厭々ながら思い知らされた。でも、あの時、あの上司に電話をしなかったら、僕らの恋はまだ続いていただはずだ。私は、勝手に想像を巡らして、終わった自分の恋からなかなか抜け出せなかった。

短い夏と秋が、慌ただしく過ぎて行きすぐに卒業が来て、私は、私に建前でない本音の大人の世界の入り口を見せてくれた詩集団『渦』の人たちと別れてその街を出た。

(その一・完)

さあ、これであの頃のことは、みんなつまびらかにした。

三浦康子さんの二十余首を印字したA4紙を傍にして、私が蜜柑箱の底から取り出した黴臭い「渦」は、私が会員になってからの「渦」と、他に笠井さんからもらったそれ以前の「渦」とを合わせた十五冊ほどだった。それらの一冊ずつを開いては、女性会員の投稿詩を取り敢えず、全部声を出して読んでいった。

ぶつぶつ言っているように見えたらしい私に、妻がやって来て、「何か昔の調べ事でもしているの？ 厭な黴臭い匂いが、家中をあちこち漂っているわよ」と言った。私は

「うん、昔のこと、昔のこと」と曖昧に答えた。

三浦康子さんが、誰なのかも分らない今、説明しようとしたって話は長くなる。それに若いころの話を、微に入り細に入り、話せはしない。話せないことだって誰にもあるのだから。

妻は「そうなの」と言っただけでそれ以上に立ち入って聞いてこなかったのは有難かった。

「渦」のガリ刷りのページを、暇に任せては丁寧に繰って見たが、三浦康子さんの二十余首の短歌に結び付くような、詩作品に出合うことはなかった。

三浦さんの短歌の中のをやさしく語り掛けるような調べは、あの男勝りの力強い詩を書いていた笠井さんのものとは思えないし、前衛的であからさまな詩を書いていた三方さんとはもともと縁遠いもののようにしか思えなかった。

ただ、少し気になったのは、電話交換手の畑中さんの詩の作品の中に、短歌を挿入しているものが、時々見られたことだ。畑中さんは自由詩と口語調の短歌を一つの作品の中に組み合わせるという、独特のスタイルを創っていた。口語調の短歌は、後に俵真智が「サラダ記念日」で一世を風靡したが、それよりも二十年以上前のことだ。

それは置くとして、女性会員の中で、あの「渦」の街から東京方面に出たのを私が知っているのは、三方さんと、高等看護学院を卒業後上京して、某大学の教育学部の養護教諭課程に編入学したと聞いている笠井さんの二人である。

いや、実はもう一人、気になる人がいるのはいるのである。「渦」の会員の中で二十歳前は、笠井さんと私の二人だけと書いたが、私が入会して二か月遅れて、私の一年後輩の高二の松つちちゃんがいや松永慶子君が会に出るようになった。彼女も高校の文芸部員であったが、私は「渦」のことは学校では内緒にしていたのでどうして彼女が「渦」の例会に出るようになったのか知らなかった。聞くと、私が部室に置き忘れていた「渦」の会誌の「会員募集欄」を見て、直接「綾さん」に電話して、取り敢えず「見学会員」として入れてもらっているのだと言った。笠井さんには、綾さんからきちんと話しがあっていたようだった。

私が未だ二年生だった時、部室で三年生の笠井さんと親しく話しているのを見るとすぐに、「私も話に入れてください」と一年生なのに臆せず寄ってくるという気さくな性格であった。笠井さんが卒業して、私が後任の文芸部の部長になってからは、松ちゃんの私への接近度は煩いほどに増した。「渦」の見学会員の件も、その現れだったのだが、私は構って

はいられなかった。学校では、部長として彼女に関わっていたが「可愛い」という表現は合っていないかもしれないが、まあそうした後輩であった。

後に、松つちゃんは、彼女が自虐的に言う「花嫁修業短大」に進み、地元の大手企業の社員と早々に結婚したことを、年賀状で教えてくれた。この大手企業は、半島の工業地帯にも工場を持っており、確か旦那の転勤で移り住んだということを風の便りで聞いたように思う。だとしたらそのまま、この半島の街に住み続けているかもしれない。すると、三浦康子の名前に一番近くなるのだが、果たしてそうなのか。

「渦」の会員の中でただ一人、詩の中に短歌を絡ませて載せていた電話交換手でハイミスだった畑中さんについては、その後結婚されたのかどうか、ずっとそのまま地元に住まわれているのかどうか、私は知っていなかった。

それにしても、三浦康子さんとはだれだろうか。

地方紙の編集部に、三浦康子さんの連絡先を尋ねたとしても、個人情報管理の厳しい新聞社が教えてくれるはずの無いことを私は知っていた。

悶々とした日を送っていた私に、ふとある考えが浮かんだ。

窮すれば通ずるという、そんな経験を私は現役時代に、幾度となくしていた。不思議でも何でも無いことである。「解決策が浮かんで来ないのは、まだまだ窮していないからだ」と言うのが私の自分への、又部下たちへの口癖だった。

そうだ、笠井さんにも、三方さんにも見せ、「渦」の会誌に載せたこともあるあの六行詩「哀しみ」を、この地方紙の「半島詩壇」に投稿してみよう。

若し、それが採用されて「半島詩壇」に掲載されたら、笠井さんにして、三方さんにしろ、もちろん、他の誰か、松ちゃんにしろ、電話交換手だった畑中さんやほかの女性会員の誰かであったとしても、北洋一という投稿者の名前とあの短詩を見たら、次に投稿する三浦康子さんの短歌の中に、リアクションが現れるはずだ。

それを見れば、三浦康子さんが誰だか解かるはずだ。

窮すれば通じるである。そう思った。

(その二・完) (2026.6.30)